



夜な夜な短歌集 第15巻 2018年 秋号

題「文」

あや・ふみ・ぶん・もん。さあ、幕開けです。



## 借花

文字列を君の名前と空目した看板のあるこの街がすき

言葉では足りないようので便箋に金木犀のあめをふらせる

そのニ文字が言いたくて言えなくて言っ欲しくて四つ葉をさがす

秋の花って控えめな顔して自己主張がっよい。好き。  
秋の空って大きそうなくせにすく色を変える。好き。



S e r i i

あわい

まちあわせ駅の雑踏ゆき交う足八行もどり五行もどって

絶え間なく流されてきて葉さすふと花びらを浮かべてみたく

ページとじ目をとじたまま手をおいたこぼれでた音ひろいあつめる

かたちになっていない、ほのかに漂うもの、それに触れたい

June



# 恋文

スラスラと万年筆で書く文字が美しすぎて一目惚れした

文系で文学好きで文才がある君が妬ましいけど好き

ツンデレな君が手紙に「大好き」と書く文字見て僕は恋をした

文って何だろうと思ったときに、真っ先に思いついたのが恋にまつわる文でした。  
今は見る機会も少ないよね。



esam



## 魔法のことば

久しぶりもらったメールが優しく外していいかな留めた掛け金

存在の愛しさ胸にほっかりと漂うような朝の四文字

「ありがとう」茶化ささず笑わず真剣に告げる癖字にぐっときている

文面、文字、メール。大切なひとから発せられた言葉には特別な力があると思います。

レイ



結んでひらいて

左胸辺りに出来た文字化けはどうやら君を好きなのらしく

きみのながほどかれとけてうつくしき文様となるゆびをからめる

結ばれた文ほどかれとけて文となり別れの言葉告げに訪る

てる

言葉ってやっぱり不自由だと思う、「この感じ」って  
そうそうは上手く伝えられない。だからまた面白いのかなと



好きすぎて

すきなのかきらいなのかをカタカナで言ってください二文字以内で

文字数に制限なけりや何個でも好きな所は言えるんだけど

人という文字にも見える影が伸び夕陽は何故か真っ赤になった

nonたん

文脈に乱れを感じる場合の文句は私に言いなさい。  
長文で返します。



# 文房三宝

ペン先のカーブを見つめさりげない時候の挨拶考えている

葡萄色のインクに託す胸の内 実り豊かであれと祈りを

溢れ出す文字便箋じゃ足りなくて今すぐきみに会いに行きたい

筆、墨、硯、紙。硯の現代版が思い浮かばず、  
文房四宝にはなりませんでした（笑）。

hanak



文通はやめた

オフィス中のパソコンキーがいつせいに打たれてまるで潮騒のよう

書きなれぬ手紙の文字は会話より緊張しているようでおかしい

ドタキャンされたペアチケットの片割れを風船につけ飛ばしたい今

テイ

「文」という文字のイメージで詠んでみました。



# て中学校文芸部文集

あの頃の文字まで残る灼けた紙  
ソネット・メルヘン挿絵もあって

六人で書き継ぐリレー小説の途中で急に変わる文体

二つ折りの藁半紙綴じる文集のインクの匂い残る放課後

みちくさ

サラダ記念日以前の学生だった我々の倶楽部活動では  
だれも短歌なんて詠んでいなかったのです



## 第二十六回文学フリマ東京

紙を折りホチキスで綴じ紙を折る 繰り返すほどに精度はあがる

文フリに行きたいという子連れて遠足の日のようにバスに乗る

採算は取れたかと問う子がいれば安心して趣味に打ちこめるなり

太田青磁 (Sage)

短歌人というところで歌を作っています。

ほどよい距離感をもって楽しく短歌を続けていきたいです。



だけど夜は散文のものだからまわり道して歩く

ぽっかりと口を開けたるスーパーに鶏手羽 100 円の文字踊りおり

よろよるとステップを踏む路上にて真夜のポストに放る恋文

さびしさを深呼吸してうめているやはりあなたは来ないのでした。

ふみ

むずかしかったです。もうぼろぼろですけどごすいません。

著者近影

THE END

完成度の低い自主制作映画みたいだ日常なんてそうだら

小指ないことに気づいてゆるやかに敬語になってくサウナ室内

THE ENDの文字が消えても期待しているんだ物語の続きを

ちゃありい

血液検査の結果、正式に花粉症だと認定されてしまいました。  
秋ですね。ブタクサを筆取りたいこの頃です。



# 王国のカギ

PCのログインパスよ、Remember 一師走の声に急かされている

降ってくる「それ」を解凍できなくて31のアイスが食べたい

本文のあとのイニシャルに苦笑する駅の伝言板じゃないのに

七色一味

明日は仕事。焦って落ちてくる塊を解凍しきれずタイムアップ。  
(。\_。)  
ソー残念。



## 文箱

キーボードもう打てないとハガキからはみ出しそうな父のひらがな

文箱にうずもれていた長3に父が遺した絹目の写真

送料と差し出し先を知らなくて色褪せそうな空への手紙

momonga)もも(

挽歌というものを、詠んでみようと思った秋です。



## 祈り

誕生日忘れるわけがないだろと書かれた「三冊」を友の声で読む

そしてまた名前を告げて手を握るわからなくても変わらぬ絆

プライドの鎧を捨てて闘いに挑む姿を焼きつけておく

雪（永山 雪）

大切な大切な友人へのラブレターです。



もじのうみ

いなくなる度に知らない町の名を書いて寄越した「今チユニスです」

下手な字を丁寧に書く人からの絵ハガキ剥がし過去形にする

もじのうみ 海は私とつながって時々過去の私を拾う

れいぽ

くもんのお迎えに行く時にひらめきました。  
あー公文にも文の文字が！笑



## 編集後記

猛烈に暑かった夏が、後ろ髪をひかれながら去っていきます。この秋のお題は「文」。本読みな詠み人達は何を連想するか楽しみにしておりました。文字に比重があるのは、読書メーターならではのでしょうか。そして本好きは文具好きでもあると、常日頃感じております。言葉を紡ぐことに対して、どなたも紳士淑女であるように感じました。

企画・編集・写真 momonga（もも）

夜な夜な短歌集第14巻2018年秋号／2018年10月発行／企画・編集 momonga（もも）

- 当歌集に掲載されている文章・画像等の無断転載はご遠慮下さい。使用する際は、事前に確認していただくようお願いいたします。歌集の紹介や読書メーターでのレビューは大歓迎です。
- 『夜な夜な短歌コミュ』とは、読書メーターにあるコミュニティです。短歌が好き、短歌を詠みたいというメンバーが集まって交流をしています。みなさんも良かったら一緒に短歌を作ってみませんか？

\* [夜な夜な短歌人による 夜な夜な短歌コミュをみる](#)